みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4847

米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて*

岸　上　伸　啓

Bowhead whaling and associated feasts are central parts of contemporary Inupiat life in Barrow, Alaska. This paper describes and discuses the "*apugauti*" feast which is a part of the whaling complex. The "*apugauti*" is a feast provided for the villagers by each successful boat captain at the shore of the village, when the boat captain's *umiaq* (a skin covered boat) is brought ashore at the end of the spring whale hunt. These feasts do not necessarily occur simultaneously, but typically occur individually after each boat captain hauls his *umiaq* to shore, signaling the end of that particular boat captain's spring hunt. Since the 1980s, this feast became greater in scale. It is not held for religious purposes, nor is it economically critical to the villagers. But it provides one of the opportunities where villagers obtain and eat *mikigak* (fermented whale meat) and goose soup, and the consumption of these delicacies reconfirms the Inupiat identity. Also, the boat captains and their crews who carry out the feast typically attain high social reputations. It is argued that the enlargement of the festival in the 1980s was brought about by the Inupiat leaders in order to keep their cultural distinctiveness against the increased pressures of Americanization on their traditional way of life.

1．はじめに

1972年にスウェーデンのストックホルムで国連人間環境会議が開催された。この時に「クジラを救うことなくして（この地球）環境は守れない」というスローガンのもと、クジラの保護が主張された。以降、クジラが環境保護のシンボルの役割を果たすようになったのである。1982年には国際捕鯨委員会（以下、IWCと略称）においてシロナガスクジラやザトウクジラなど13種類の大型鯨類に対する商業捕鯨のモラトリアム（一時的停止）が決定された。

一方、先住民が生業として実施する捕鯨に関して、IWCは捕獲頭数の制限枠を設定

したうえで、捕獲を許可している。これは、先住民生存捕鯨と呼ばれ(注１)、先住民の歴史的、栄養学的、文化的な必要性からIWCが特別に承認している捕鯨である。IWCでは、先住民生存捕鯨を次のように定義している。

> 「原住民による地域的消費を目的とした捕鯨であり、古くからの伝統的な捕鯨や鯨利用への依存が見られ、地域、家庭、社会、文化的に強いつながりをもつ、原住民・先住民・土着の人々により、またはそれらの人々に代わって行なう捕鯨」(Gambell 1993: 103-104、訳文はフリーマン他1989: 190)。

2010年現在、IWCが先住民生存捕鯨と認定している捕鯨は、ロシアのチュコト半島の先住民が行っているコククジラ猟とホッキョククジラ猟、アラスカ先住民が行っているホッキョククジラ猟、米国ワシントン州のマカーによるコククジラ猟、グリーンランドのカラーリットによるクジラ猟（ミンククジラとナガスクジラ、ホッキョククジラの捕獲)、カリブ海にあるセント・ビンセントおよびグレナディーン諸国のベクウェイ島民によるザトウクジラ猟である。

筆者は2006年より、米国アラスカ州バロー村に住むイヌピアットの捕鯨および鯨肉・脂皮の分配・流通に関する調査を実施してきた。この一連の調査によって、捕鯨活動やその産物の利用はイヌピアットの生き方やアイデンティティにとって重要であることを確認した（岸上 2007, 2009)。筆者は別稿において、極北先住民の生業活動は、獲物の捕獲から加工・処理、分配・流通、消費、廃棄へといたる一連の活動系とそれに関連する儀礼の活動系から構成され、その２つの活動系には、行動的側面、社会的側面、技術・道具的側面、イデオロギー的側面、認識的側面が存在していることを指摘した。すなわち生業活動とは、この２つの活動系に関連する文化的・社会的・物質的要素からなる経済システムであると主張した(注2)(岸上 2008)。現在のイヌピアットによるホッキョククジラ猟はまさにこのモデルに適合する事例である。

筆者は、現在のイヌピアットによるホッキョククジラ猟を理解するためのひとつのステップとして、ホッキョククジラ猟と関連しているアプガウティ (*apugauti*)という一種の祝宴について報告し、その社会・文化的意義や変化を検討したい。

本稿の次節以降の構成は、以下の通りである。第2節では、アプガウティを報告するための歴史的かつ社会的な背景に関する情報を提供する。すなわち、アラスカ先住民の捕鯨、調査地であるバロー村の歴史と現状、同村の捕鯨と年中行事について記述する。第3節では、筆者が参与観察を行った2009年のアプガウティの準備や実施、変化について報告する。第4節では、その事例をもとにアプガウティの意義や変化について検討を加える。そして第5節では結論を述べることとしたい。

2．アラスカ州バロー村におけるイヌピアットによる捕鯨と祭りについて

2.1　アラスカ先住民の捕鯨

ベーリング海沿岸地域では約2000年前からクジラの利用がはじまったと言われている。当時のハンターがどの程度、意図的にホッキョククジラやコククジラを捕獲していたかどうかは不明であるが、少なくとも海岸に流れ着いた寄りクジラを利用したことは間違いない。考古学的には紀元後1000年ごろからアラスカ沿岸に住む人々がホッキョククジラなどの大型鯨類を捕獲し始めたことが分かっている(Savelle 2005)。捕鯨を生業とする人々は、チューレ文化と呼ばれる独自の生活様式を形成し、それは300年のうちにグリーンランドにまで拡散し、現代のイヌイット文化の祖形を創り出した。アラスカの西北部沿岸から北西部沿岸にかけて、この捕鯨の伝統は現在まで受け継がれている。

G・シーハンは、1850年代のアラスカ北西部沿岸地域でのイヌピアットによる捕鯨活動など1年の生活周期を再構成している。捕鯨ボート・キャプテン(*umiliat*、ボートの所有者。以下、キャプテンと略称)を中心に複数の乗組員が春と秋にホッキョククジラ猟を実施していた。当時のイヌピアットの生活は、この捕鯨活動を中心に1年のうち36週間(9ヵ月)以上がキャプテンによって組織され、実施される活動に費やされていた(Sheehan 1997: 196-197)。1850年ごろのキャプテンによって組織されていた諸活動（期間）は、秋季捕鯨（2週間以上）、秋季祭り（2週間）、冬季祭り（2週間以上）、冬季交易（8週間以上）、春季捕鯨の準備（4週間）、春季捕鯨（8週間以上）、ナルカタック祭（10日間）、夏季交易の準備（5日間）、夏季交易（8週間）の合計で36週間以上にのぼった(Sheehan 1997: 197)。このように、かつてのイヌピアットの活動の大半は、捕鯨もしくはキャプテンとかかわる活動であった。

獲物の解体後に、乗組員や解体を助けた他の捕鯨グループに鯨肉や脂皮（マタックと呼ばれる、脂肪の付いた皮部)、脂肪が分配された。その余剰は、キャプテンによって3つの方法で乗組員やその他の村人へとさらに分配されていた。第1に、村全体で共食や特定の客を対象とした招宴を通して分配された。第2に、余剰の食料は、ボートの乗組員や彼らの家族、そのほかの村人に分配された。第3に、交易やそれに続く贈与によって余剰の食料はさらに分配された(Sheehan 1997: 198)。また、捕鯨に深く関係しているナルカタック祭(*nalukataq*、ブランケット・トス祭とも呼ばれている)などの祭りにおいて村人全員を対象とした祝宴や食料の分配が実施された。捕鯨は海獣狩猟や交易とも深く関係しており、イヌピアットの中心的な活動であった。

しかし、この捕鯨文化は、ベーリング海および北極海における商業捕鯨の開始によって大きな変容を余儀なくされた。1848年から1914年ごろまで北極海でアメリカ人を中心にした商業捕鯨が実施された結果、過剰捕獲のためホッキョククジラの生息数が激減し、先住民の捕鯨活動に悪影響を及ぼした(注３)。先住民の中には商業捕鯨船に乗り込んだり、沿岸に設置された捕鯨基地で賃金労働に従事したりする者も現れた。

また、商業捕鯨船やその後やってきた交易船の乗組員は、先住民からクジラの髭やセイウチの牙、海獣や陸獣の毛皮を入手し、その見返りとして火器や鉄器、酒類、ビーズ、衣類などを交易した。火器や鉄器などは生産性の向上に貢献したが、酒類は社会的な混乱の元凶となった。さらに、外部社会との接触を通して結核やはしかなどの伝染病が伝わり、人口の減少や社会の弱体化を引き起こした(Bocksotoce 2009)。

アラスカのイヌピアットやユピートは、ホッキョククジラの頭数が激減していた20世紀はじめから1970年ごろまでは、年平均11頭を捕獲していた。しかし1970年代に入ると捕獲頭数は年平均30頭近くになったうえに、銛の打ち損じによる捕獲の失敗も増加したので、資源量の枯渇の恐れが出てきた。このため、IWCは1977年にアラスカ先住民のホッキョククジラ猟にも既存の一般的な規則を適用し、彼らの捕鯨を禁止した(浜口 2002: 28)。

このIWCによる禁止に対して1977年8月にはアラスカのイヌピアットとユピートは、10の捕鯨村の代表から構成されるアラスカ・エスキモー捕鯨コミッション(the Alaska Eskimo Whaling Commission、以下AEWCと略称)を結成し、米国政府とともに禁止を解除するためのロビー活動を展開した。その結果、IWCはアラスカ先住民に対して1978年に年間12頭の捕獲もしくは18回の銛打ちを認めた。

1981年3月にAEWCは米国政府の代表を相手に協力合意を取り付け、政府機関の国立大洋気象庁(略称NOAA)とホッキョククジラを共同管理することになった。捕獲制限枠はIWCで5年ごとに検討され、現在では、地域全体で5年間275頭の捕獲が承認されている。現在、アラスカ州でホッキョククジラ猟を行なっているのは、イヌピアットとユピートの人々である。前者の村には、ウェールズ、キヴァリナ、ポイント・ホープ、ポイント・レイ、ウェインライト、バロー、ヌイックサット、カクトヴィクがある。後者の村には、セント・ローレンス島のガンベルとサヴォーンガおよびリトル・ダイオミードがある。なお、筆者の調査地であるバロー村では、1年間30頭弱の捕獲が許されている。

2.2　バロー村の現状

バロー村は北緯71度29分、西経156度79分に位置し、チュクチ海に面するアメリカ合衆国最北端の村である(注4)。夏は日照時間が長く、冬には太陽が昇らない長夜が出現する。寒冷ツンドラ地帯にあるため2月の平均気温は摂氏零下27.7度、7月の平均気温は摂氏4.1度で、海が凍結しない期間は、6月中旬から10月ごろまでである。

1867年にアラスカが米国領になると、米軍が1881年に、現在のバロー村の近郊に気象・磁気研究所を設置した。さらに1893年には捕鯨会社や交易所が建設され、1899年には長老派の教会が開設された。1914年ごろまでは現バロー村の沖合いでアメリカ人による商業捕鯨が実施されていた。

第2次世界大戦中のアラスカは軍事的に重要な地域であったが、戦後の冷戦時代にも対ソ連の軍事戦略的な要所となった。現バロー村の近くにはDEWライン(早期ミサ

イル発見警戒レーダー基地網）のレーダー基地が設置された。また、1946年から海軍による石油探索が開始されるとともに、現バロー村の郊外に海軍の極北調査実験所が開設された。これらの諸施設の周辺に、多数のイヌピアットが住み始め、バロー集落は1958年に行政村として認定された。

1968年に石油会社アルコ(ARCO)社とハンブル・オイル社(Humble Oil)がバロー村の東方に位置するプルドー湾で石油を発見した。1969年にアラスカ州がプルドー湾の貸借権をこれらの石油会社に売却したため、これに反発した先住民がアラスカ州政府および米国政府と政治的に対立した。この問題を処理するために政治的な交渉が行われた結果、1971年にはアラスカ先住民諸権益処理法(Alaska Native Claims Settlement Act、ANCSAと略称)が成立した。この処理法に基づいて、アラスカ先住民は居住地域ごとに12の地域会社に組織され、全体として4,400万エーカー（約17万8千平方キロメートル）の土地と9億6,250万ドルの補償金を手に入れた。1972年にはノース・スロープ郡(North Slope Borough)が創設され、バロー村は郡の政治経済の中心地となった。プルドー湾において石油開発が始まった1977年から、バロー村は油田開発やその関連事業に労働力を提供している。

バロー村は、この地域の政治経済の中心であり、多数の仕事が存在しているため、ノース・スロープ郡の他の村々と比べると、イヌピアット以外の人口も多い。2003年の統計によると、バロー村の総人口は4,429人で、その内訳はイヌピアットが61.3パーセント、白人系が20.9パーセント、その他の人々が19.9パーセントである(North Slope Borough 2004のBarrow P1. : 2003 Census Snapshotより)。その他の人口は、フィリピンや韓国、タイからの移民が多い。

2003年の時点では、バロー村の世帯総数は1,415であり、一世帯あたり3.26人が居住している。イヌピアットと非イヌピアットの世帯員数にはあまり大きな差はなく、1人世帯や2〜3人の少人数世帯が増加しているという共通の傾向が認められる (North Slope Borough 2004: BRW-6)。

極北地域の多くの村と同様に、バロー村の経済は、貨幣経済と生業経済が混交する形で存在している。同村には、約1,300から1,500の仕事がある。2003年を取り上げれば、57パーセント弱が国家公務員もしくは地方公務員で、44パーセント弱が民間会社の職員である。民間企業の就業先には、タクシー会社、航空会社、ホテル、レストラン、石油・天然ガス関連企業、銀行、小売店、ヘアサロン、観光業、そのほかの自営業がある。ただし、バロー村先住民会社とノース・スロープ先住民会社はANCSAによって国家から得た補償金を管理・運営する企業体であるため、準公共団体のような会社といえる。このように考えるとバロー村の就職口の約68パーセントは公務員もしくは準公務員であるといえよう。

1993年の統計によると、バロー村に住むイヌピアットの平均世帯年収と平均個人収入は、それぞれ約5万4千ドルと約1万3千ドルであった。6万ドル以上年収のあるイヌ

ピアット世帯は、342世帯中118世帯であった。この数字を見るとかなりの現金収入があることが分かる。しかし一方、2003年の同村の失業率は19.4パーセントあり、かなり高いといえる。

2.3　バロー村の捕鯨と1年

現在のバロー村には、賃金労働に従事していない者（失業者など）や引退した者を除けば、フルタイムのハンターは存在していない。多くのハンターは、フルタイムの仕事であれ、パートタイムの仕事であれ、村の中で現金収入を得ながら、週末や仕事のない時間帯に狩猟や漁撈に従事している。しかし、なかにはまったく狩猟や漁撈に従事しない若者も少数ではあるが存在している。

バロー村では春季の捕鯨と秋季の捕鯨を核として1年の生業が営まれているといって過言ではない。その理由は、捕鯨の時期以外にさまざまな陸獣や海獣、鳥類、魚類が捕獲されているが、その獲物が捕鯨の準備や実施、その後の祭りのために使用されているからである。

バロー村の近海でイヌピアットが捕獲するのはホッキョククジラである。春季の猟期は4月下旬から5月下旬にかけて、秋季の猟期は9月末から10月中旬にかけてである。現在のバロー村には約50人のキャプテンと300人以上の捕鯨ボートの乗組員（ハンター）が存在している。

狩猟・漁撈・採集を捕鯨や祝祭との関連で時系列的にみると、次のようになる。4月に入ると捕鯨の準備を開始するが、それと並行して海岸沿いの氷上でカモ猟を行う。4月下旬から5月にかけては捕鯨に従事する。春季捕鯨に成功したキャプテンは、その翌日に村人を自宅に招き、祝宴を開催する。さらに、その季節の捕鯨が終了し、ウミアック(全長5～6メートルの皮製大型ボート)を陸揚げするときに、この春の捕鯨に成功したキャプテンは、それぞれ村人を海岸に招き、アプガウティと呼ばれる祝宴を開催する。アプガウティは5月下旬から6月上旬に開催されることが多い。

6月には沖合いでワモンアザラシやアゴヒゲアザラシを捕獲し、村の近くの海岸部ではカモ猟や内陸部でのカリブー猟が行われる。内陸にキャンプに行く場合には、河川や湖での漁撈や鳥の卵の採集が行われる。捕鯨の祭りであるナルカタック祭が6月中旬から下旬にかけて実施される。ナルカタック祭は、その春にホッキョククジラを仕留めたキャプテンたちが主催する祝祭であり、祝宴やブランケット・トス（乗組員や関係者がウミアックの船体カバーであったアザラシ皮を縫い合わせたシートの端を持ち、その上で一人ずつ高く跳び上がるトランポリンのような遊び)、伝統舞踊が実施される。ナルカタック祭では、クジラの肉や脂皮、発酵肉料理、カモのスープなどが村人に振舞われる。

7月から8月にかけては、アザラシ猟やシロイルカ猟、セイウチ猟、カモ猟、カリブー猟が行われる。9月には引き続きアザラシ猟やセイウチ猟が行われる。バロー村ではセイウチをあまり捕獲することができないので、この時期に捕獲するアゴヒゲアザラ

シの皮が翌年の春季捕鯨のウミアックの船体カバーとして利用される。9月下旬から10月にかけてIWCの捕獲枠が残っていれば、秋季捕鯨を開始する。

10月になると日照時間がきわめて短くなるが、スノーモービルを利用して内陸に行き、川や湖でカワヒメマスやホワイトフィッシュを漁網で捕獲する。11月から12月には村から約8～16キロメートル離れた場所でカリブーを捕獲する。この時期に、捕獲したクジラの肉、内臓、脂皮を料理用に処理し、感謝祭やクリスマスの祝宴の準備を開始する。11月の第4木曜日には感謝祭の祝宴が、12月24日にはクリスマスの祝宴が実施される。クリスマスから年始にかけては村全体で祝宴やゲーム、ダンスが催される。

1月になるとウミアックの船体カバーを縫う作業や補修する作業が始まる。オオカミ猟やクズリ猟が行われるとともに、バロー村の沖合いの海氷の割れ目が広がるリード（海氷原と海氷原の間の海域）でアザラシ猟を行う。2月から3月にかけてはリードや海氷上でアザラシ猟が、内陸ではカリブー猟が行われる。この時期には、キャプテンは、各自の所有する地下貯蔵庫(永久凍土を掘って作った貯蔵庫)に残っている鯨肉や脂皮を取り出し、村人に分け与えるとともに、貯蔵庫を掃除し、雪氷を底に敷きなおす。

捕鯨以外の狩猟や漁撈は、たいてい個人もしくは親子や兄弟らと共同して実施される。それらの狩猟や漁撈はモーターボートや船外機付きカヌー、スノーモービル、ライフル銃、散弾銃、漁網を利用し、1人ないしは2～4人の小集団で行われる。また、キャプテンとその乗組員が協力して祝宴に必要な食料を確保するために集団猟を実施することもある。

現在のバロー村では、捕鯨がイヌピアットの最大の関心事であり、生業活動や祭りは捕鯨と関連して実施されている点を強調しておきたい。その諸活動の全体を「捕鯨複合」と呼ぶことができる（岸上 2007: 122）(注5)。そしてそれらの諸活動を担う社会単位は、キャプテンとその妻を核とした捕鯨グループである。

3．2009年6月実施のユーゴ捕鯨グループのアプガウティについて

本稿では、アプガウティという祝宴を取り上げ、準備や実施のやり方、歴史的変化や意義について紹介する。

3.1　アプガウティとは何か。

アプガウティとは、春季捕鯨が終わる時に開催する祝宴である。捕鯨に成功したグループがウミアックを陸に揚げるときに、グループごとに村人を海岸に招き、開催する。アプガウティとは、現地語で「陸にぶつかる」という意味である。

3.2　2009年のユーゴ捕鯨グループの春季猟

2009年のバローにおける春季捕鯨は、風向きの関係でリードが開かず、不猟であった。この年の春季にバロー村でクジラを捕獲できたのは、J.レビット氏とR.ニンギオ

ク氏の2人を共同キャプテンとするユーゴ捕鯨グループなど４グループのみであった。筆者は、2009年6月15日午後3時から村の海岸で開催されたユーゴ捕鯨グループのアプガウティの準備と実施を参与観察する機会に恵まれた。以下、報告するのは同グループの事例である。

3.3　アプガウティの準備

アプガウティで村人に提供する食べ物や飲み物は、ミキガック(*mikigak*)と呼ばれる発酵肉、ガン類やカモなどのスープ、エスキモー・ドーナツやパン、紅茶、コーヒー、ジュースである。

ユーゴ捕鯨グループの乗組員たちは、捕鯨に成功し、鯨肉や脂皮を貯蔵庫に収納すると、ウミアックを村の海岸近くの海氷上まで運び、捕鯨グループの旗を立て、仮置きする。その後、内陸部へ行き、ハクガンやカナダガンを捕獲する。これはアプガウティや6月下旬に開催予定のナルカタック祭の祝宴のためである。捕獲したガン類は、地下貯蔵庫に保存しておく。ガン類はアプガウティの前日に解体処理され、当日の朝からスープを大きな鍋に6杯分作った。

ミキガックとは、クジラの肉、脂皮、脂肪、血液をバケツに入れ、約2週間かけて発酵させた食べ物で、酸味と甘みのある珍味とされている。この料理を作るには、バケツの中の肉などを1日に2度かき混ぜなければならない。通常、アプガウティを開催する2週間ぐらい前から作りはじめる必要がある。ユーゴ捕鯨グループは、今回5リットル入りバケツに10杯分のミキガックを用意した。

エスキモー・ドーナツは一種の揚げパンのようなもので、捕鯨グループの乗組員の妻らが手分けして作る。パンも手分けして焼くが、時間がない場合には地元のスーパーで購入することもある。アプガウティ開催当日の昼過ぎには、紅茶やコーヒー、ジュースを大量に準備する。ミキガック以外の食べ物や飲み物は、キャプテンや彼の捕鯨グループに属する乗組員とその家族が数日をかけて用意する。

アプガウティ開催の3、4日前からキャプテンの住宅の前庭で、乗組員やその家族が入れ替わり、立ち替わり現れ、アプガウティの準備をするとともに、6月のナルカタック祭用に鯨肉やひれの部分、約15メートル分の脂皮を切り分ける作業を行った。切り分けた鯨肉や脂皮などは、紙箱に入れ、ナルカタックの開催日まで地下貯蔵庫の中に保管された。

アプガウティの開催当日になると、朝から鳥のスープを作りはじめる。それと並行して会場となる海岸での準備をはじめる。ビニールシートの風除けの幕を立て、教会から長椅子やテーブルを借りてきて並べる。

キャプテンは、無線機を利用して村人にアプガウティの開催場所と時間を知らせる。さらに、村の古老に電話をかけるとともに、村のラジオ放送局に情報を流してもらう。

午後2時45分ごろになると、捕鯨グループの乗組員やその家族が手分けして、料理を会場へと運ぶ。このころになると、徐々に村人が会場に集まりはじめ、料理のおかれ

たテーブルを遠くから円状に囲む。午後3時ごろには約300人の村人が会場に集まっていた。

3.4 アプガウティの実施

午後3時になると、海岸近くの海氷上に置いてあるウミアックを数名の乗組員が海岸まで漕ぐ。海岸に到達すると、ウミアックを捕鯨グループの乗組員全員で担ぎあげ、祝宴会場の近くまで走りながら運び、置く。それを見ている村人から歓声があがる。

捕鯨グループの乗組員が会場に到着すると、料理をおいたテーブルを中心にキャプテンと乗組員、彼らの家族が円状に立ち、手をつなぐ。キャプテンは、キリスト教の神に捕獲成功の感謝を述べ、祈りをあげる。その後、彼の数分間の挨拶が終わると、祝宴の開始である。

捕鯨グループの乗組員やその家族が、やってきた村人の一人一人に鳥のスープをアルミ皿や彼らが持参した食器に注いだ。それからパン、飲み物(紅茶とコーヒー)、ミキガックを順番に来客に振舞っていく。祝宴と言っても、その場で食べる人もいれば、ミキガックなどをもらって自宅に帰る人もいる。キャプテンは、老人たちに必ずミキガックが行きとどくよう配慮していた。

午後4時15分ごろには、提供する料理が底をついたので、キャプテンは終了を告げた。村人は三々五々に会場を去っていった。その後、捕鯨グループの乗組員やその家族が会場の後かたづけをした。

このように、アプガウティとは食事を中心とした祝宴である。

3.5 アプガウティの変化

不思議なことに、このアプガウティに関する民族誌的記述は皆無に等しい。村人へのインタビューや民族誌を調べることにより、いくつか興味深い点が判明した。第1に、このアプガウティという祝宴は、ポイント・ホープなどの他の捕鯨村では行われていない（ポイント・ホープではナルカタック祭の一部として実施されている)。第2に、バロー村の中でもキャプテンの判断で実施するグループもあれば、実施しないグループもある。第3に、本稿で紹介したようなアプガウティが実施されはじめたのは1980年代以降である。それ以前のアプガウティは、捕鯨を終えたキャプテンと乗組員たちを彼らの家族が海岸で出迎え、食事を提供することであったという。それがある時から、村人を招いてミキガックや飲み物などを提供するようになり、内容も小型のナルカタック祭の祝宴のように変化した。

第3の点を補足しておきたい。機械化が進む以前の春季捕鯨は現在と異なり、きわめて労力を必要とする作業であった。とくに海氷上で解体した肉や脂皮、内臓をキャプテンの貯蔵庫に収納するためには、犬ぞりを駆使して何度も解体場と村との間を往復する重労働であった。このため、捕獲したクジラの解体および処理、収納を終え、さらにウミアックを陸上に揚げるころには乗組員たちは疲労困憊していた。そのような労をねぎらうため、キャプテンと乗組員らの家族が村の海岸で彼らを出迎え、食事

を提供したのがアプガウティの原型であるようだ。

4．検討

本稿では、春季捕鯨の後で開催される祝宴アプガウティについて報告したが、２つの問題が解明されるべきであると考える。第１の問題は、現在のアプガウティは村人にとってどのような意義があるかである。第２は、なぜアプガウティが1980年代を境に大規模化したのか、という問題である。

アプガウティは、捕鯨の成功と関連する祝宴である。しかし、すでに述べたように、祝宴の冒頭でキリスト教の神に感謝の祈りをささげるが（注６）、それ以外には宗教的な色彩はほとんど認められない。この祝宴が宗教的な目的でないとすると、どのような目的や機能、効果があるのか。

アプガウティの開催日時や規模は、キャプテンが、その時々の状況を全体的に総合して判断する。バロー村では、例年10数頭のクジラが春季猟で水揚げされ、その数だけのアプガウティが開催されるが、2009年は不猟の年で、4頭しか水揚げがなかった。このため、キャプテンは、より多くの村人がアプガウティに参加するだろうと予想した。アプガウティによっては、80人程度しか参加しない場合があるが、当日、約300人が集まったことからもわかるように、ボートキャプテンの判断は間違っていなかった。ハンターを退いた老人やハンターがいない世帯の人々は、アプガウティに参加することで、ミキガック（発酵肉）という文化的に価値の高い伝統料理を味わうことができる。すなわち、アプガウティは、イヌピアットの人々が珍味として大好物の発酵肉が村人に提供される数少ない機会のひとつなのである。

この祝宴に参加した村人が、口にすることができる発酵肉の量や鳥のスープ、エスキモー・ドーナツもしくはパン、コーヒーなどはせいぜい１食分か２食分である。何人かの古老は、発酵肉を余分にもらって、自宅に持ち帰ることもあるが、村人にとって、この祝宴は食料を獲得するという点では経済効果はあまりないと言える。アプガウティは、経済効果というよりむしろ、発酵肉や鳥のスープなど伝統的な料理を食することによって、イヌピアットとしてのアイデンティティを確認する機会になっている点で意義があると考える。

また、アプガウティは、その内容や規模によって村人がキャプテン夫妻の社会的な評価を決定する場でもあるといえよう。村人が満足し、喜ぶようなアプガウティを開催したキャプテン夫妻は、より高い社会的な評価を得ることができる。また、彼らのみならず彼らの捕鯨グループの村内での社会的な地位も高くなるのである。

次に1980年代のアプガウティの大規模化について考えてみたい。複数の村人にインタビューをした結果、1980年代にアプガウティの祝宴の対象が捕鯨グループ内から村人全体へ拡大し、それに伴い規模も大きくなったことが判明した。しかし、なぜ、そのようになったかについてはインタビュー調査からは確証を得ることができなかった。

この問題を解明するうえで、当時の北アラスカのイヌピアット社会の状況を全体的に把握することが必要であると考える。1980年代は、土地権問題が決着し、油田開発も進み、大量の資金がイヌピアット社会に流れ込み始めた時期であった。また、1977年のIWCによる捕鯨禁止の危機を乗り越え、捕鯨が人々のアイデンティティの核として再認識された時期でもある。さらに、米国の主流社会の諸影響や経済のグローバル化にさらされ、イヌピアットの生活様式が大きく変化していた時期であった。この時期には興味深い現象が併発している。たとえば、1988年に70年間あまり中断していたキヴィギック(*Kivgiq*、使者祭)が再開された。生田博子によると、これはより堅固で集合的アイデンティティや民族としてのプライドを高めるためたいという意図をもって、イヌピアットのリーダーが協議し、復活させたという(Ikuta 2007)。そしてこの祭りの実施の経済的な基盤には、ノース・スロープ地方政府と同地域の先住民団体および個々のイヌピアットに支払われた石油会社からの多額の配当金の利用が認められた。同様に、1980年代には文化遺産センターの建造や学校での二言語併用プログラムの実施など、イヌピアットの伝統的な知識やプライドを強化するようなイヌピアット文化の再活性化運動が実施された(Bodenhorn 2001)。

筆者は、アプガウティの大規模化も同じ社会・経済的な脈絡の流れで理解する必要があると考える。すなわち、イヌピアット独自の祭りや祝宴の活性化は、グローバル化が進みイヌピアットとしての生活様式全般がアメリカ化（主流社会に同化）していく中で、自らの存在の独自性を主張する（主流社会から異化する）ための象徴装置として彼ら自身が祭りを復活させたり、捕鯨に関連する祝宴を大規模化させたりしたことに起因した、と筆者は主張したい。そしてそれを経済的に可能とした背景には、同地域での油田開発に由来するオイル・マネーの存在があったといえよう。

5．結語

アラスカ北西地域沿岸に居住するイヌピアットの大半は、社会内での多様化が進みつつあるものの、ホッキョククジラの捕獲活動とそれに関連する準備や祭り、祝宴を生活の中核とみなしている。本稿では、現在のアラスカ先住民イヌピアットの「捕鯨複合」の一部を形成するアプガウティという祝宴を紹介し、検討を加えた。

アプガウティとは、春季捕鯨に成功した捕鯨グループのキャプテンが、猟期の終わりにウミアックを陸揚げする時に、村人を海岸に招き、発酵肉などで饗応する祝宴である。この開催は、宗教目的ではなく、個々の参加者に対する経済効果もあまりない。しかし、希少な料理の提供・入手やそれを食べることによってイヌピアットとしてのアイデンティティを確認する効果およびアプガウティの開催がキャプテンとその捕鯨グループの社会的名声を高めることなど、象徴的な効果があるといえよう。また、1980年代におけるアプガウティの大規模化は、グローバル化による生活様式全体のアメリカ化に対抗して、イヌピアットが自らの独自性を主張し、アイデンティティを保

持するために引き起こした現象であると考える。

今後の課題として、捕鯨に関連するキャプテン宅での祝宴、ナルカタック祭、使者祭などをより詳細に調査し、記録に残すとともに分析したい。そのような調査を積み重ねることによって、現在の「捕鯨複合」の全体像を描き出し、解明したいと考えている。

*この調査を行うにあたり、バロー・ボート・キャプテン協会のEugene Brower氏とJohnny Leavitt氏からは特別のご協力を得た。記して感謝の微意を表したい。なお、本論文は、平成19年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）「先住民をめぐる異化と同化の力学に関する人類学的研究」(研究代表者：スチュアートヘンリ)および平成21年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」(研究代表者：岸上伸啓)の研究成果の一部である。

注

(注１) 通常、Aboriginal Subsistence Whalingは、原住民生存捕鯨と訳されている。2010年のモロッコでのIWC総会において、その名称はIndigenous Subsistence Whalingへと変更された。筆者は、両方とも「先住民生存捕鯨」と訳している。

(注２) 筆者は現時点では、筆者は、生業活動を「経済システム」ではなく、「社会経済システム」であると表現した方が適切であると考えている(Wenzel, Hovelsrud-Broda and Kishigami 2000: 3)。

(注３) 1849年から1914年までの期間にベーリング海やチュクチ海、ボーフォート海で捕獲されたホッキョククジラの頭数は16,594頭と推定されている(Bockstoce et al 2005: 4, 6)。

(注４) バロー村の名称は、イギリス海軍のジョン・バロー卿に由来している。

(注５)サカキバラ・チエは、捕鯨とそれに関連する諸活動を周期的なシステムとみて、「捕鯨サイクル」(whaling cycle)と呼んでいる(Sakakibara 2010)。

(注６)アラスカのイヌピアットは1890年代から1910年ごろの間にキリスト教に改宗したことが知られている(Burch 1994)。

引用・参考文献

（和文）

岸上伸啓

2007 「クジラ資源は誰のものか―アラスカ北西部における先住民捕鯨をめぐるポリティカル・エコノミー―」秋道智彌編『資源とコモンズ』(資源人類学８)

pp.115-136, 東京：弘文堂。
2008 「文化人類学的生業論—極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 529-578。
2009 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察－アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 493-550。

浜口尚
2002 『捕鯨文化論入門』京都：サイテック。

フリーマン、ミルトン他
1989『くじらの文化人類学—日本の小型沿岸捕鯨』高橋順一他, 東京：鳴海社。

（欧文）

Bockstoce, John R.
2009 *Furs and Frontiers in the Far North: The Contest among Native and Foreign Nations for the Bering Strait Fur Trade.* New Haven and London: Yale University Press.

Bockstoce, John R. et al
2005 The Geographic Distribution of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus,* in the Bering, Chukchi, and Beaufort Seas: Evidence from Whaling Records, 1849-1914. *Marine Fisheries Review* 67 (3): 1-43.

Bodenhorn, Barbara
2001 It's Traditional to Change: A Case Study of Strategic Decision Making. *Cambridge Anthropology* 22(1): 24-51.

Burch, Ernest S. Jr.
1994 The Iñupiat and the Christianization of Arctic Alaska. *Études/Inuit/Studies* 18(1-2): 81-108.

Gambell, Ray
1993 International Management of Whales and Whaling: An Historical Review of the Regulation of Commercial and Aboriginal Subsistence Whaling. *Arctic* 46(2): 97-107.

Ikuta, Hiroko
2007 Iñupiaq Pride: *Kivgiq* (Messenger Feast) on the Alaskan North Slope. *Études/Inuit/Studies* 31(1-2): 343-364.

North Slope Borough
2004 *2003 Economic Profile and Census Report.* Barrow: Department of Planning and Community Services, North Slope Borough.

Sakakibara, Chie

2010 *Kiavallakkikput Agviq* (Into the Whaling Cycle): Cetaceousness and Climate Change among the Iñupiat of Arctic Alaska. *Annals of the Association of American Geographers* 100(4): 1003-1012.

Savelle, James M.

2005 The Development of Indigenous Whaling: Prehistoric and Historic Contexts. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67), pp. 53-58. Osaka: National Museum of Ethnology.

Sheehan, Glenn

1997 *In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society. Anchorage*: Alaska Anthropological Association.

Wenzel, G. W., G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami

2000 Introduction: Social Economy of Modern Hunter-Gatherers: Traditional Subsistence, New Resources. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.1-6. Osaka: National Museum of Ethnology.

(国立民族学博物館・総合研究大学院大学)